

Contemporary India Forum

Quarterly Review

現代インド・フォーラム

No. 50

2021年 夏季号

<https://www.japan-india.com/>

特集 「歴史が現代インドに及ぼした影響」

多様性で解く現代インドー古代からの視点

Diversity and Indian Heritage, Keys to Understanding Modern Indian Society

長田俊樹 (総合地球環境学研究所名誉教授)

Toshiki OSADA (Emeritus Professor, Research Institute for Humanity and Nature)

中・近世インドのムスリム国家から現代インドに 継承されるべき遺産

Some Legacies which India should Inherit Today from Medieval and Early
Modern Muslim India

長島 弘 (長崎県立大学名誉教授)

Hironu NAGASHIMA (Professor Emeritus, University of Nagasaki)

ベンガル湾海域圏を歴史的に展望する

Strategic Significance of the Bay of Bengal in the Historical Perspectives

重松伸司 (南アジア史研究者)

Shinji SHIGEMATSU, PhD (Researcher of South Asian History)



公益財団法人 日印協会

The Japan-India Association



- ※ 本誌掲載の論文・記事の著作権は、公益財団法人日印協会が所有します。
- ※ 無断転載は禁止します。(引用の際は、必ず出所を明記してください)
- ※ 人名・地名等の固有名詞は、原則として執筆者の意向を尊重していません。
- ※ 政党名等の日本語訳は、筆者が使用しているものをそのまま掲載しています。
- ※ 各論文は、執筆者個人の見解であり、文責は執筆者にあります。
- ※ ご意見・ご感想は、公益財団法人 日印協会宛にメールでお送り下さい。

E-mail: partner@japan-india.com

件名「現代インド・フォーラムについて」と、明記願います。

現代インド・フォーラム 第50号 2021年 夏季号 2021年7月1日発行

発行人 兼 編集人 平林 博

編集協力 現代インド研究センター

発行所 公益財団法人 日印協会

〒103-0025

東京都中央区日本橋茅場町 2-1-14

TEL: 03(5640)7604 FAX: 03(5640)1576

多様性で解く現代インドー古代からの視点
Diversity and Indian Heritage,
Keys to Understanding Modern Indian Society

総合地球環境学研究所名誉教授

Emeritus Professor, Research Institute for Humanity and Nature

長田俊樹

Toshiki OSADA

Abstract: *Diversity is a key word to understand modern Indian society. I visited India for the first time in 1978. My visits to India have become almost annual practice, including six years of studies in Ranchi university. Since then, my researches have been focused on Munda linguistics and Indus civilization. As my studies are not in a main stream of South Asian studies, I believe paradoxically that my following analysis and observation may provide uniqueness in understanding India of today. According to Marxist's paradigm, ancient societies have both slavery system and authoritarianism by rulers. Thus Indus society was for long interpreted as such society, and yet this interpretation is difficult to be sustained by the artifacts recovered from excavation sites. I would propose the Indus society as a society with high divergency, fluidity and spirit of mutual aid and support. Indus society had certain commonalities with modern society in India. The first Prime Minister of independent India, J. Nehru advanced a slogan "Unity in diversity" at the independence. However, Indian people tends to emphasize only the aspect of Unity. In fact, diversity is really a typical feature of Indian society. So I, as a Professor in linguistics, always advise my students to learn more than two languages of India. Otherwise they could not understand what diversity means in India. We tend to look at a single "Indianess", but real Indianess lies not in single but in multiple diversity.*

はじめに

インドに初めて行ったのは1978年1月である。それから40年以上が経った。この40年間、6年間の留学期間を含め、ほとんどインドに通い続けてきたのだが、筆者が関わってきたのはインドの少数民族であるムンダ人世界とインダス文

明世界である。インド研究のメインストリームからはずいぶんとかけ離れている。だからこそ見えてくるものがあるのではないか。その思いから小論を執筆している。

インドをはじめ、アジア諸国が植民地支配からの独立の際に叫ばれた言葉がある。それが「多様性の中の統一」である。統一国家として、独立を果たすためには必要不可欠な標語だったことはまちがいない。ところが、インド独立からすでに75年が経とうとしている今日、世界規模の「多様性」の喪失が問題となり、多様性の維持が叫ばれている。人間の考え方はずいぶんとご都合主義的である。「統一」が叫ばれていた時代には多様性が維持されていたはずなのに、その「統一」されたものの力によって「多様性」が駆逐されると、あまりにもモノカルチャーな世界に危機感を持つ。

そんな中であっても、インドは多様性を維持し続けている。それはインダス文明時代から現代まで続いているのではないか。また、統一されたインド的なものばかりを議論するのではなく、ヨーロッパにおいて、各国の事情を理解しようとするように、多様性の源泉である各地域の事情を理解していくことが大事ではないか。それが小論の主張である。そして、多様性を理解するカギは多言語使用にある。インドにおいては、家で話す言語、地域で話す言語、学校で話す言語の三つを使い分けることはごく当たり前だ。例えば、デリーに住むベンガル人の場合、家ではベンガル語、地域ではヒンディー語、学校では英語と多言語使用を日常的にこなしている。多言語使用者にとって、多様性が当たり前であり、それがインドの多様性維持に大きな役割を果たしている。小論では、多様性をキーワードに言語学的な視点を加え、現代インドへの一視点を提供したい。

I. インダス文明とは

1. 従来 of インダス文明像

筆者は2006年から2012年まで、総合地球環境学研究所(=地球研)でインダス文明に関する共同研究をおこなった¹。日本のチームがインダス文明遺跡の発掘をおこなったのは我々が初めてである。インダス文明は古代四大文明の一つであり、インダス川流域に勃興した大河文明と考えられてきた。しかし、遺跡分布をみると、大河流域だけに広がっているのではない。砂漠の真ん中や海外沿いにも広がっている。あきらかに、大河文明とはいいがたい。

インダス文明のイメージはこれまで解釈だけが先行したものが多かった。インダス文明の名を高めた考古学者ウィーラーは「アイデアには翼がある」という名言とともに、インダス文明をメソポタミア文明と比較して、インダス文明像を築き上げた。メソポタミアでは「穀物倉」が重要な役割を果たしたのだから、イン

ダス文明にもあるはずだという推測から、モヘンジョダロでも、ハラッパーでも、穀物倉跡とされる場所がある。しかし、現在、ハラッパー遺跡にある説明用の看板には、「初期の学者たちはこの建物が穀物倉として使われたと提唱したが、どここの部屋からも穀物を貯蔵した証拠は見つかっていない」と明記されている。

2. 古代文明に対する唯物史観的解釈

もう一つ人気のある解釈がある。「アーリア人侵入」によって、インダス文明が破壊されたという説である。1970年代にはすでに否定されている学説なのだが、今でも講演会でお話しすると「アーリア人侵入」について必ず質問される。文明が滅んだのならば権力闘争が起こったに違いない。中国の征服王朝ばかり、ノルマン人の征服ばかり、権力闘争史観はあちこちで見られる。しかも、三国志や国盗り物語のように、権力闘争を題材とした歴史物語は人気がある。デジタル時代にゲームとなるほどである。また、権力闘争には戦争がつきものだ。そのために、素焼きの玉を投弾用の武器とみなす。武器らしきものが出土しないので、武器を作り上げないといけないのである。

これらすべてが解釈による、つくられたインダス文明像なのである。そして、その解釈を支えているのがマルクス主義的唯物史観だ。古代国家は奴隷制のもとに築かれている。聖職政治、労働者の宿舎、神官王、それらはメソポタミアからの類推であると共に、唯物史観が描く発展段階説の古代国家観と合致する。インダス文明には武器に類するものが少なく、またピラミッドのような権力者の墓や記念碑もなく、奴隷制に基づく古代国家が成立していたのかどうかもあやしい。

3. 新しいインダス文明像

では、どのようなインダス文明像がより実像に近いのか。そのキーワードが多様性と流動性である。インダス文明をある特定の社会集団による統一された国家とみなす必要はまったくない。多言語多民族が混在し共存しあう一大ネットワークと我々はみなす。たとえば、インダス文字だって、それぞれの言語で思い思いの読み方をしていたとしても不思議ではない。東アジアの住む漢字文化圏の人々は漢字をそれぞれの言語で読んでいたのだから、インダス文字がある特定の言語でのみ理解できたと考える必要はない。ネットワークというためには流動性が必要だ。ランデル・ローの研究によって、鉱物資源とそれを原料とするアクセサリ-の研究によって、グジャラート州の海外地域にある紅玉髓がハラッパー遺跡で加工されていることが明らかになり、流動性が高かったこともわかってきている。インダス文明は奴隷制度に基づく古代国家ではなく、多民族多言語社会が共存し

ながら相互扶助しながら支えあったネットワークである。これが新しいインダス文明像である。

また、これまでの研究成果からは、インダス文明の衰退はアーリア人や特定民族の攻撃によるものでもないし、水害や地震といった天変地異によるものでもない。インダス文明後の遺跡分布をみると、インドのガンジス平原など東に移動していることがわかる。そこで、インダス文明の衰退は民族が東に移動することで、インダス印章を用いたネットワークが自然消滅していった結果ではないかと考えている。

II. アーリア人

1. 比較言語学とアーリア人

日本では、「色白で目鼻立ちがはっきりしたアーリア人」とか、「モンゴロイドが多いアッサム地方」とか発言しても、言葉狩りが多いネット社会でも、大炎上することはない。それほど人種概念に対して無関心である。ところが西洋ではこの人種概念は民族差別を助長するものとして問題になることが多い。とくに、アーリア人がナチスによってユダヤ人大虐殺の根拠とされたことから、「アーリア人」という用語は慎重に使用しないと民族差別者とのレッテルを張られ学会活動も難しくなる可能性だってある。また、印欧祖語の故地についても、1980年代までは盛んだったが、コンセンサスには程遠く、年代測定や人種問題などから、あまり議論されなくなってしまった。

アーリア人とはもともと言語学用語だ²。18世紀末、サンスクリット、ギリシア語、ラテン語が共通の源から出たことをウィリアム・ジョーンズが初めて指摘した。ジョーンズはイギリスに生まれ、判事としてカルカッタに赴任し、サンスクリットを学び、ベンガルアジア協会を組織したことで知られる。このジョーンズの指摘から比較言語学が生まれ、19世紀にはインド・ヨーロッパ(印欧)語族の存在が知られるようになる。その印欧語族の共通の祖先言語を印欧祖語と呼び、印欧祖語の話し手をアーリア人と呼ぶようになった。それが人種概念に使われるようになったのはマックス=ミュラーが使ったからである。

2. マックス=ミュラーによる「リグ・ヴェーダ」解釈

このマックス=ミュラーは「リグ・ヴェーダ」からこんな説を流布させ、それが今でもインド古代史の通説として語り継がれている。その通説とは、「アーリア人は先住民ダーサを「黒い肌の者」と呼んでいる。そうした肌の色の違いが支配者・被支配者の区別を示したことは、「色」を意味するヴァルナという語が身分・

階級の意味をもつことから知られる。さらにアーリヤ人は先住民を「牡牛の唇をもつ者」「鼻のない（低い）者」とも呼び人種の違いを強調」と古代史概説に記されている。また、「ダーサはドラヴィダ系の民族らしい」とあるが、このダーサ＝ドラヴィダ説は現在否定されている。

この事実と思われた通説もマックス＝ミュラーによる解釈に過ぎない。比較言語学者ハンス・ホックによると、「黒い肌」を指す単語は「民族や肌の違い」を決して指さないこと、「牡牛の唇をもつ者」の「唇」は「頬」や「顎」「髪飾り」を意味し、「鼻のない（低い）者」は「言葉がうまくしゃべれない者」を意味する可能性があるという。つまり、人種の相違を強調するために、マックス＝ミュラーが選んだ解釈だったのである。19世紀のインド支配を正当化するために生み出された解釈がいまだにまかり通っている。何とも不可思議極まりない。

3. インドにおける歴史解釈と古代史

インドではこうした西洋中心主義的な解釈に異を唱える人々がいる。「アーリヤ人の侵入」などはなく、アーリヤ人はインドを起源とし、インダス文明もアーリヤ人が築いた文明である。インド人民党政権下において、こうした主張がそれなりの力を得てきている。日本で歴史解釈が問題となるのは近代史以降であるが、インドでは古代史がやり玉にあげられることが多い。「アーリヤ人＝ヒンドゥー教徒」という置き換えをおこなっていること自体問題だし、この説が実証的に証明される可能性はほとんどない。

もともと言語学の用語だった印欧語族からアーリア人という人種が生み出されているが、これが根本の問題である。また、日本では印欧語族という名の民族がいるように解釈された文章をよく見かける。どちらも族がつくから間違えやすいが、語族とは language family の訳で、起源を同じくする言語グループしか指さない。ダーサが同じ印欧語族に属する言語を話していたように、同じ印欧語族を話していても多民族であることは十分ありうるのである。多様性を軸にインダス文明を見直したように、権力闘争史観に彩られた古代史も塗り替えられることを希望してやまない。

おわりに

インダス文明は大河文明である。アーリヤ人は先住民族ダーサを「肌が黒い」とみなした。こうした通説はいつまで教科書に記載続けるのだろうか。筆者が拙著で紹介したことは、決して筆者だけの意見ではなく、世界的にはある程度受け入れられている。しかし、日本の教科書が書き替えられる日はまだまだ来ないよ

うな気がする。一つには、何かステレオタイプ化されたインドイメージの方が落ち着くし、その方が本も売れるし、マスコミも喜ぶ。

裏を返して考えると、「多様性の中の統一」とは統一の方に重きが置かれたインドイメージのステレオタイプにすぎないのかもしれない。多様性といいながら、紙幣に書かれた言語の数を表示する程度でお茶を濁し、やっぱり「インド」らしさがどこか漂うことを求めている。多様性といいながら、多様の実態に迫ることよりも、統一されたイメージに触れるほうがインドを実感できる。哀しいかな。それが現実である。

インドの多様性ということで見つ先に挙げられるのが言語の多様性である。しかし、現代インド諸言語を話せる人は、インドは英語で済ませることができるという考えもあって、あまり多くはない。まして、研究者ということでは指で折って数えられるほどである。筆者が専門とするムンダ語を研究する人は世界的にいても、ほとんどいないのが現状である。文化の指標は言語である。まだまだ知られていない言語がインドにはある。そうした言語にトライすることで、インドの多様性を実感し、複眼的にインドを眺めるならば、新たな視点が生まれるのではないだろうか。

(2021年5月30日)

¹ 以下に述べることは拙著『インダス文明の謎：古代文明神話を読み直す』（京都大学学術出版会。2013年）に基づく。小論ではそれぞれの出典は示さず、詳細は拙著を参照。

² 以下は拙著『新インド学』（角川叢書。2002年）による。引用などは紙数の都合で表示しないが、詳細は拙著を参照。

執筆者紹介 長田俊樹（おさだ・としき）

ラーンチー大学(インド)Ph.D.取得。現在、総合地球環境学研究所名誉教授。国立国語研究所客員教授。神戸市外国語大学客員教授。

主著に『新インド学』（角川叢書）『インダス文明の謎ー古代文明神話を見直す』など。



中・近世インドのムスリム国家から現代インドに
継承されるべき遺産

Some Legacies which India should Inherit Today
from Medieval and Early Modern Muslim India

長崎県立大学名誉教授

Professor Emeritus, University of Nagasaki

長島 弘

Hiromu NAGASHIMA

Abstract: *Under the first and second Modi governments of India so-called Hindu majoritarianism seems to have increased influence. We hear that Muslim are made targets of communal hate crimes. Are there any legacies which India should inherit today from medieval and early modern Muslim India? In this paper the term “medieval and early modern Muslim India” means “India under the Delhi Sultanates and Mughal Empire”. According to Irfan Habib, eminent scholar of Indian history, it is remarkable that the wave of qualified pantheism of Ibn al-‘Arabi (d. Damascus, 1240) should have begun to dominate Indian Islamic thought about the same time that the pantheism of Shankara (c. 750)’s school of Vedanta was attaining increasing influence within Brahmanical thought. Akbar of Mughal Empire and the brains of his policy, Abu al-Fazl, also accepted the pantheistic monotheism. The policy of equal treatment of all religions (as distinct from simple policy of tolerance) that Akbar enforced, was a policy for which it was not easy to find a parallel in the contemporary world. This policy must have been a good precedent for India’s secularism after independence. This must be one of the important legacies which should be inherited by India today. Sanjay Subrahmanyam, also famous historian of India today, points out how cosmopolitanism was clear at Surat, the most important and prosperous port city of Mughal Empire. Both the Dutch and the English could construct many tall mausoleums at Surat, while the Dutch were not permitted to do so at Nagasaki in those days.*

はじめに

2014年に成立したインド人民党（BJP）を中核とした第一次モディ政権下では教育・文化・社会などの面でヒンドゥー多数派主義の浸透が進められた。2019年に成立した第二次モディ政権でも、ジャンムー・カシミール州に独自憲法を認めていたインド憲法 370 条を停止する大統領令を出す（19年8月）など、ヒンドゥー多数派主義の傾向が一層強まっているようである¹。

本稿で筆者に与えられた課題は「歴史が現代インドに及ぼした影響」のうち、「ムガル帝国ないし中世インドのイスラーム教がいかに現代に引き継がれ、影響しているか」という課題である。したがって、現代インドに見られる影響を中心にみるべきであるが、ここでは筆者の能力の関係もあり、上記のようなモディ政権下の現状を見るにつけ、現代インドが中・近世インド史から学ぶべき遺産はないのかという角度から考えてみたい。

I. イスラーム教の中世（中・近世）インドへの浸透が及ぼした宗教的・政治的な影響

1. インド中世のヒンドゥー教とイスラーム教

ムスリムのインドとの出会いには海路と陸路の交易など平和的なものと軍事的侵入とがあったが、アリーガル・ムスリム大学の碩学イルファン・ハビーブによれば、インド人がインド人という意識（愛国心）を持つようになったのはムスリム勢力と直面した結果であった。ペルシア人やアラブ人はインド人（インダス川の向こうに住む人々）全体を「ヒンドゥー」と呼んだが、彼らがインドに侵攻すると、インド人はムスリム以外の自分たちのみをヒンドゥーと呼ぶようになった。それと並行して宗教の性格も変化した。宗教は単純なものではなく、ユダヤ教、キリスト教、イスラーム教などは一神教であったが、インドのブラフマニズム（後のヒンドゥー教）、仏教、ジャイナ教、あるいは日本の神道などは一神教ではなかった。当時の仏教やジャイナ教は神の存在を拒否した。イスラーム教の浸透の中で、ヒンドゥー教もその影響を受けた。南インドのケーララ地方出身のシャンカラ（ヴェーダーンタ学派、750年頃没）は不二一元論という宗教哲学を唱えたが、それは身体を含めた一切の現象世界も宇宙の根本原理であるブラフマンから展開したものであるという意味で、汎神論的である。彼の汎神論が広がるのを見たのは中世であった。それはイブン・アラビー（1240年、ダマスカス没）の汎神論的な存在一性論がインドの神秘主義者（スーフィー）の間に広がり始めた時期でもあった。全体として中世の間に汎神論的一神教の方向へイスラーム教もヒンドゥー教も変化したのである。カビールやシク教のナーナクらのバクティ思想もイス

ラーム教の影響を強く受けている²。その意味で、「イスラーム教の浸透がヒンドゥー教に何の影響も与えなかった」というのは歴史的に根拠づけられたものではない。他方、イスラーム教徒（ムスリム）の歴史家や学者が「イスラーム法が近代の平等の概念を招来した」というのも正しくない。中世インドのムスリムの学者はヒンドゥー教徒を偶像崇拝者だと批判したが、彼らは決してカースト制度を批判しなかった。社会に貧富の差があることは彼らにとって当然のことであったからである。

2. ムガル帝国皇帝アクバルの平等主義的な宗教思想・宗教政策

ムガル帝国のアクバル帝やそのブレーン（顧問）だったアブル・ファズルも汎神論的な一神教を受け入れた。彼らの場合、帝国統治政策としてもそれを採用した。アクバルは早くから宗教的関心が強く、正統イスラーム教（スンニー派）の学者やスーフィーを尊敬していた。その後、「祈りの家」と呼ばれる建物を建て、そこで宗教学者らに議論させた。最初の参加者は正統イスラーム教の代表的な学者たちであったが、その後、ムスリムの神秘主義者、シーア派、さらにはバラモン、ヒンドゥー教隠遁者、ジャイナ教徒、パールシー教徒、キリスト教徒（イエズス会派）にまで拡大された。その結果、彼はどの宗教、どの宗派の解釈も正しくないが、どれも部分的にはあれ真理に依拠していると確信した。彼自身は、神に選ばれた者として、自らには宗教宗派間のつまらない争いを避けさせるために「スルヒ・クル（絶対的和解）」の実現を支援する任務があり、すべての宗教に寛容でなければならないが、その宗教を信仰する必要もない、という考えに到達した。アクバルの先例を受けて、ムスリムの中にもヒンドゥー教の經典に関心を持つ者も現れた。アクバルはサンスクリット作品（『アタルヴァ・ヴェーダ』、『マハーバーラタ』、『ラーマーヤナ』など）をペルシア語に翻訳させた。アクバルのブレーンであったアブル・ファズルはそれらの翻訳も利用して、彼の著した『アーイーニ・アクバリー』（一種の百科事典、地誌）の中でヒンドゥー諸学派についてかなり正確な記述を行っている。彼はヒンドゥー教徒も神を崇拝し、一神教であると述べている。次のジャハーンギール帝もヴェーダーンタの知識は「タサウフ（神秘主義）の知識である」と述べている。ムスリムのヒンドゥー教についての理解はシャー・ジャハーン帝の長子ダーラー・シュコー（1659 没）に至って頂点に達した。彼はその著『マジュマー・アルバフライン』（両流の合流）で、イスラーム教とヒンドゥー教の神秘主義・一神教の主要な概念を説明した。また、その後、難解なウパニシャッド哲学の作品をペルシア語訳した。

単なる寛容主義を超えてすべての宗教を同等に扱うアクバルの政策は彼の宗教思想形成のはるか以前から実施されていた。1560 年代に非ムスリムへの巡礼税や捕虜の改宗の禁止やジズヤ(人頭税)の廃止を行った。彼は偶像崇拝やヒンドゥー

の寡婦の殉死、幼児婚、イスラーム教における男女の遺産額の不平等、外見のみの聖者などを批判しているが、皇帝としてはスルヒ・クルの立場で進んで各宗教の儀式に参加し、土地を寄進するなどした³。ムガル帝国の宗教政策は、シャー・ジャハーン帝、さらにはアウラングゼーブ帝の治世に、かなり大きく変質した。したがってムガル帝国を通じて同一の宗教政策であったわけではないが、宗教差別を許さないアクバルの宗教政策に関しては、独立後の現代インドの政教分離主義の先例とも言え、今後も継承されるべき大事な遺産であろう。

II. ムガル帝国最大の港市スーラトに見られたコスモポリタン主義

ムガル帝国の社会の寛容な側面の一端はグジャラート地方南部の当時帝国最大の港市スーラトに顕著だったコスモポリタン主義にもうかがわれる。現代の歴史家サンジャイ・スブラフマニアムの説を、一部私見も加えながら、紹介したい。

17世紀インドの主要交通路とスーラト



ポルトガル（1500-1663）支配下のケーララのコチ（コーチン）はコスモポリタンな都市であったように見なされたが、ポルトガル人や他のヨーロッパ人の居住区と現地のラージャ（王）やユダヤ人、ムスリムの居住区とに大きく2区分されていたし、その後オランダの支配下にはいった後も住民の流動性や統合性はスーラトより低かった。

スーラト（スーラト県内の都市部）では 2 世紀以上にわたって流動性が高く、諸コミュニティが民族や信条によって分断されて住むようなことはなかった。1540 年代にポルトガルの攻撃から防御するためにスーラトに大砲を装備した城を建てたグジャラート王国の太守はムスリムに改宗したイタリア人で、彼はその城を守るために近隣のラージプート（ヒンドゥー）と同盟している。パールシー商人ルスタム・マナク（1719 没）はポルトガル、次いでイギリス東インド会社の仲買人兼外交使節として活躍した。また探究心旺盛なスコットランド人（ジェームス・フレイザー）がチシュティー派のスーフィーの弟子となり、その結果、アクバルのブレインだった知識人アブル・ファズルを尊敬するようになったのもここであった。彼が蒐集し持ち帰った写本類は後にオクスフォード大学ボドリアン図書館に納められた。ポルトガル、イギリス、オランダ、フランスもムスリム商人や高官の持ち家を借用して商館とすることが多く、ヨーロッパ人だけが一面にまとまって居住することはなかった。たしかに、ある程度の職業ごとの集住の傾向は見られたが、社会的、商業的な関係は宗派を超えて行われた。たとえば 17 世紀末から 18 世紀初めにかけてのスーラトの大富豪でムスリムの船主商人アブドゥル・ガフルはガンガーダースやラージャラームといったバニヤ（バニヤは商人カーストのヒンドゥー教徒とジャイナ教徒の総称）の仲買人を雇用していたし、ムスリムの商人や高官がバニヤの両替商からの融資に頼ることも常であった。1669 年に起こったスーラトのカーズィー(裁判官)によるバニヤ商人たちへの迫害に抗して、バニヤの全家長総勢 8,000 人は集団で同市を脱出し、近隣の都市からグジャラート州太守を介してアウラングゼーブ帝に提訴し、皇帝から善処の約束を得た後スーラトの家に戻った。この事件ではスーラト県知事やグジャラート州太守はバニヤたちに同情的であった。

スーラトにはオランダ東インド会社の墓地とイギリス東インド会社の墓地が現存している。前者はアルメニア人墓地と隣接している。イギリス人墓地は少し離れているが、蘭・英どちらの墓地にも立派な廟が建ち並び、最高の廟は高さ 10m もある。最近イギリス墓地のドームと小尖塔を持つオクスデン兄弟（弟 1659、兄 1669 没）の廟が、インド人建築士によって煉瓦の上に漆喰を塗るインド・イスラーム建築の伝統に沿って建てられたものであるとの説が出されている。コスモポリタン主義の一端であろう⁴。同時に、このような広大なキリスト教徒の廟建築を許可したムガル帝国の寛容さがうかがわれる。「鎖



オクスデン兄弟の廟

国」下の日本ではオランダ人による墓の建築などほとんど許可されなかったからである。

スーラトの場合、17世紀を通じて、中央から派遣されたスーラト県知事の任期は当時の長崎の代官に比べて短く、そのため統治においては長崎以上に現地の役人や商人等に依拠せざるを得なかったと思われる⁵。現地の商人がスーラト県知事に任命された事例も見られる。当時のスーラトの貿易関税率もインド洋海域で最も低いと言っていいほどであった。これらもコスモポリタンな都市が成立した背景であろう。

おわりに

ムスリム勢力の侵入から何世紀かを経てアクバル帝治下のムガル帝国では彼自身の統治能力の高さと理性的で平等主義的な宗教政策の下でおそらく当時の世界でも稀な高水準の安定した社会を享受していたと言えよう（17世紀の日本もタイプは違うが同様の安定を享受したが）。宗教思想の面でも一神教的方向でヒンドゥー教とインドのイスラーム教の相互理解が大いに深まった時期であった。もちろん、ここで見たのはそのような方向の事例であり、当時のインドにはそれとは異なる方向も見られたのであり、その方向が17世紀後半になると顕著化して来る。その意味でも現代インドがアクバル時代の歴史から学ぶべきことは少なからずあるのではなかろうか。

(2021年6月21日)

¹第一次、第二次モディ政権のヒンドゥー多数派主義をめぐる動向については三輪博樹(2021)「2010年代のインド政治」、堀本武功・村山真弓・三輪博樹(編)『これからのインド 変貌する現代世界とモディ政権』東京大学出版会、24-30頁、また志賀美和子(2020)「ヒンドゥー・ナショナリズムの深化とムスリム社会—トリプル・タラーク禁止法と市民権改正法の意図と影響」『現代インド・フォーラム』(No. 45 2020年春季号)、3-12頁を参照。

² ハビブの「中世」は600年頃～1750年頃。本稿の筆者はムガル期を近世と捉えるので、ハビブ説の紹介以外のところでは、中・近世期と表記する。

³ 以上については主に次に依拠している。Irfan Habib, *Interpreting Indian History*, YouTube 2020/09/17。アップロード元: Aligarh Society of History and Archaeology および Irfan Habib(2008), *Medieval India : The Study of Civilization*, New Delhi:National Book Trust, pp.25-35, 81-90, 168-195.

⁴ Sanjay Subrahmanyam(2018) “The Hidden Face of Surat: Reflections on a Cosmopolitan Indian Ocean Centre, 1540-1750”, *Journal of the Economic and*

Social History of the Orient 61, pp. 207-257; 長島弘(2016)「1730年前後作製のスーラト絵図を読み解く」、守川知子編著『移動と交流の近世アジア史』北海道大学出版会、口絵、185-214頁も参照。

⁵ ファルハト・ハサンの研究によれば、ムガル朝初期のグジャラート征服と統治は在地の宗教指導者、商人層、郷紳層、部族的・士族的グループ、都市庶民の支持を得なければ不可能だった。Farhat Hasan(2004) *State and Locality in Mughal India*, Cambridge:Cambridge University Press, pp. 12-30. 長崎との比較については、長島弘(2004)「国際港市としての近世長崎—ムガル帝国港市スラトとの相互比較試論—」『長崎県立大学論集』37-4 および、より詳細な H. Nagashima, “Surat and Nagasaki: A comparison of two international port cities in the 17th century”(近刊予定)を参照。

執筆者紹介 長島 弘 (ながしま・ひろむ)

長崎県立大学名誉教授。

京都大学文学部卒業(東洋史学専攻)。インド国アリーガル・ムスリム大学修士課程修了。京都大学大学院文学研究科修士課程終了後、博士課程満期退学。専門はインド中・近世史。主な著作に「ムガル帝国下のバニヤ商人—スラト市の場合」『東洋史研究』40-4。訳書にサティッシュ・チャンドラ著、小名康之・長島弘訳(1999)『中世インドの歴史』山川出版社。



ベンガル湾海域圏を歴史的に展望する
Strategic Significance of the Bay of Bengal
in the Historical Perspectives

南アジア史研究者

Researcher of South Asian History

重松伸司

Shinji SHIGEMATSU, PhD

***Abstract:** India is geographically regarded as a sub-continent in Asia. However, it also has a phase of maritime zone not only in the meaning of the geographical characteristics as is surrounded by Arabian Sea in the west side, Indian Ocean in the south side and the Bay of Bengal in the east side, but also in the historical context linking with South Asia, South-east Asia, and East Asia.*

The present paper focuses mainly on the Bay of Bengal and analyzes the following issues:

- 1) Comparative Analysis of the views of China and India regarding the Bay of Bengal through the strategic information and awareness in the past.*
- 2) Present situation of the Bay of Bengal in the context of influence of the Belt and the Road Initiative on Sri Lanka, southern most area of the Bay of Bengal, and on Bangladesh, inner deep port town of the Bay of Bengal.*
- 3) Vulnerability of the corporative organizations of SAARC, ASEAN and BIMSTEC which are expected to play the crucial roles to tackle the economic issues in the region.*
- 4) Perspectives of the new “Partnership” among EU, India, and South-east Asia to recover the potentials in the Bay of Bengal.*

はじめに

インドは地理的にはサブ・コンティネントである。しかし、その南はインド洋、東はベンガル湾、西はアラビア海に囲まれた海洋的特性も持つ。特に本稿で考察する東側のベンガル湾海域は南アジアの一部ではあるが、東南アジア・東アジア世界とも接続しているアジア海域世界の縮図である。

この海域は歴史的にはいったいどのような意義を持っており、インドと中国はこの海域をどのように位置づけてきたのか、そして 21 世紀の今日、この海域ではどのような国際問題が提起されるのか概観してみたい。

I. インド内陸史観の DNA

インド社会の地政学的な認識を要約すれば、基本的には内陸志向型であり、それは古代から現代にいたるまで通底している。その背景には、王朝国家の成立基盤である地理的・民族的条件によるところが大きい。

古代からインド歴代の王朝はヒンドゥスターン平原を東西 3 千キロメートルもにわたって横断するガンジス川流域の諸都市に興亡した。王朝の統治者も侵略者も、その多くはインダス川を越えて侵入する西アジアからの諸民族かヒマラヤ山系を越えて進出してくる中央アジア、モンゴル系の諸民族であり、国家存亡の関心は必然的にインドの内陸に向けられてきた。そうしたインド内陸への、より正確に言えばユーラシア内陸部の北と西からの脅威に対して、歴代王朝は常に危機意識を持っていた。

他方、海から到来する勢力に対しては、ヨーロッパ列強による植民地支配の及ぶまでは武力による侵略者の脅威におびえることはほとんどなかった。ましてや、インドの東部からは海路を通じて東南アジアの諸王国や中国がインドに進出してくることはなかったのである。

では、インドの独立後はどうであったか。パキスタンとの国境問題、カシミールの帰属問題、ヒマラヤ山系での中国との国境を巡る紛争…多くの「センシティブ・イシュー」はインドの北部一帯に集中していてインド外周の海洋ではこれまでのところはほとんどなかった。

内陸志向型の国際認識は、もはやインドの政治的な DNA ではないかと思える。

しかしこの認識は 21 世紀の国際化の激動の中で転換を求められているのではないだろうか。40 年間にわたって南インドに軸足を置いて現地調査を行い、ベンガル湾海域圏に位置するインド、東南アジア諸国、バングラデシュ、ミャンマーなどの社会を考察してきた筆者とすれば、ベンガル湾海域圏への関心を深めることが懸案ではないかと思う。

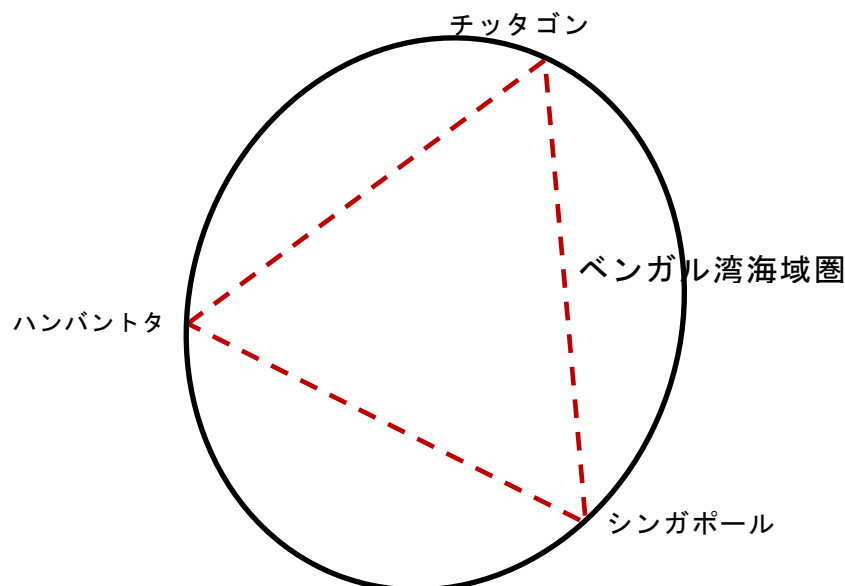
II. ベンガル湾海域圏への関心

さて、この海域をどのように理解すべきか、まずは二つの問題を設定しておきたい。

第一には、ベンガル湾海域とは、中国とインドにとって歴史的にみてどのような意義を持っていたのか、という問題である。

ここでいう「ベンガル湾海域圏」とは、空間的にはインドの東側に広がる約 220 万平方キロメートルのベンガル湾を中心としたエリアであり、歴史的にみればインド・東南アジア・東アジアの社会・経済・文化の接触・融合圏域である。図式的に言えば、ベンガル湾深奥部のバングラデシュのチッタゴン(あるいはダッカ)、スリランカ南端のハンバントタ(あるいはゴール)そしてマレー半島南端のシンガポールの三点を結ぶ「トライアングル海域」を筆者は想定しており、この域圏にはインド洋、ベンガル湾、マラッカ海峡、南シナ海が包摂される。

〈図表「ベンガル湾海域圏」と「トライアングル海域」〉



第二には、21 世紀に入って、この海域圏が新たにどのような課題を提起するのかという問題である。具体的に言えば、今日、喫緊の問題となっているインド・太平洋構想や一帯一路との国際的な緊張関係の中で、この海域圏がどのような意味を持っているのかという展望である。

III. 中国の海域認識と海洋進出

中国の東南アジア・インド情報とは歴史的にどのようなものであったか。その一端を紹介してみよう。

騎馬遊牧民族として知られるモンゴルは、また航海の達人でもあった。航海術に長け、ペルシャ語、アラビア語、インドの諸言語にも通じた通訳を乗せた船隊が「南海」に派遣された。「南海」とはつまり今日の東南アジア、インド、ペルシ

ヤ、アフリカにまで及ぶ広大な海域世界であり、それはベンガル湾海域圏とも重なる圏域である。

14世紀初期に南海交易に活躍した汪大淵(おうたいえん)。彼は、東シナ海から東南アジア、インド洋にまたがって航海し、各地の地理・風土・物産、住居・飲食・衣服、交易の品々など興味のある事実を採録している。その見聞記『東夷誌略(とういしりやく)』には、とりわけベンガル湾海域に臨むマレー半島や南インド東岸の都市や国名について詳細な記録がある。

明の時代も、やはり海外情報の収集には力を入れた。建前上は海外との交渉を禁止する「海禁政策」をとっていた。だが第三代永楽帝は「鄭和(ていわ)の南海遠征」と呼ばれる大航海艦隊を派遣し、その遠征は7次、30年に及んだ。遠征の報告記録『瀛涯勝覧(えいがいしょうらん)』や『星槎勝覧(せいさしょうらん)』は、ベンガル湾海域沿岸の地名・文物・地勢・民情・国情を網羅した膨大なデータベースとなった。植民地支配下にあった清代には海外交渉は一時途絶えたが、革命後の中国は再び海洋アジアに目を向け始めた。

古来中国は、王朝体制やイデオロギーに関わらず、外交・朝貢・貿易・遠征・親善などの大義名分によって、断続的かつ連綿とアジア海域の情勢に関心を払ってきた。それは中国の数世紀にわたる世界戦略の一環でもあった。2013年9月に提唱された「一带一路構想」は、21世紀に唐突に提起されたプランではなく、それまでに培われた相当な歴史的経験と情報の蓄積にもとづく、周到な世界戦略の一環ではないかと思われる。

IV. インドの海域認識と海外進出

インド側の海域経験と情報はかなり浅いのではなかろうか。冒頭に述べたように、インドの関心は基本的には内陸志向であり、東南アジアや東アジア(中国・日本・朝鮮を含む)の海域に関する情報は限られていた。仏僧やヒンドゥー僧の渡海によるアジア情報は確かに残されている。だが、その多くは教義・教論に関する宗論であり、政情や経済、民情、生活慣習などを奥深くにまで掘り下げた情報ではなかった。この点ではイエズス会士や西欧の探検家などの旅行記、見聞記にもはるかに及ばない。

インドの諸王朝がベンガル湾海域から東南アジアへ進出した史実もごく限られている。例えば、古代南インドのチョーラ王朝の艦船によるインドネシア遠征はあった¹。遠征とはいえ、その艦隊・兵員の規模は小さく、影響は局地的であって、軍事的支配によるアジアにおける覇権拡大の企図は見られなかった。また近代における海域圏内のインド進出といえば労働移民の動きであり、それとてインドと東南アジア諸国間の断続的な移動であって、軍事的・物理的な圧力を伴うものではなかった²。

インドの国際認識と国際進出は総じて南アジア世界での「域内」であり、歴代王朝を通じての持続的で広範な国際戦略は見られなかったといえよう。

ベンガル湾海域における近代までの状況をごく大雑把に言えば、「放任のベンガル湾海域」、換言すれば、インド・中国・東南アジア・アラブなどのさまざまな民族(エスニック)による自由な「移動・交易・漁業」の相互黙認の場であり、国家が直接に干渉し、権力でもって介入することはなかった圏域であった³。「領域国家」の多かった南・東南アジアの前近代では、地域間・小集団間の小競り合いはあっても、国家が総がかりで乗り出す海政学的な意味での対立・紛争・軍事衝突・紛争は先ず起こることはなかった。

しかし、20世紀末から21世紀にかけて事態は大きく変容し、深刻化している。

V. ベンガル湾海域圏の状況

一帯一路構想の一環である「海のシルクロード」は、中国沿岸港市から南シナ海、インド洋を経てアフリカにまで通じる経済回廊、経済協力圏の構築である。この回廊はもろにベンガル湾海域圏と抵触する。そのことから一体どのような問題が生じるのか、次の二つの事例から指摘しておきたい。

一つはスリランカ、ハンバントタ港の中国への租借問題であり、もう一つの事例はバングラデシュにおける中国のインフラ整備事業と技術援助による債務増大の問題である。

2018年6月25日のニューヨークタイムズ紙は、当時のスリランカ大統領ラージャパクサがハンバントタ港を2017年より99年間中国にリースする契約を締結したが、それは「中国による債務を通じての世界における影響力の拡大と強化(“China’s ambitious use of loan and aid to gain influence around the world”)」だと報じた(“How China Got Sri Lanka to Cough Up a Port” by Maria Abi-Habib)。スリランカの「債務の罟」に関する報道は世界に大きな衝撃を与えた⁴。

もう一つはバングラデシュへの中国による協力・投資の増大である。バングラデシュへの中国の投資はこれまで相対的に小さかった。だが、2019年度を境に、その投資額は日本・韓国・インド・シンガポールなどを抜いて、アメリカ・イギリスに次いで第3位に位置している⁵。その勢いは今後も上昇し続けるだろう。

冒頭に述べたように、海港チッタゴン(あるいはダッカ)はベンガル湾海域圏の深奥部、南アジアの「トライアングル海域」の北の頂点であり、ハンバントタは南の頂点である。

前者は、今や世界の「廃船解体工場」として知られているが、重要なことは、一帯一路構想のユーラシア内陸幹線ルートの一つ「中国・ミャンマー・インド・バングラデシュを結ぶ経済回廊」の接続港である。後者はインド洋に接続する海

洋幹線ルートの本ガル湾海域の出口である。この二点を結ぶルートは一帶一路のユーラシア内陸とインド洋の連結回廊を形成し、しかも本ガル湾海域圏を縦断・分断する幹線となりうる。

おわりに：本ガル湾海域圏の新たな課題

本ガル湾海域は、ラ・フォンドの詳細な海洋調査・分析⁶によってもなお未解明の課題が多く、漁業資源・海底資源・生態系などでも潜在的なポテンシャルを秘めている。今後、公海の本ガル湾海域に新たな「外圧」が加われば、航海権、領海権、漁業権などを巡るアジア諸地域間の均衡や圏域内の安全保障にも影響を及ぼし、国際的秩序再編の問題も顕在化してこよう。

この海域に関わる組織には、今日のところ少なくとも三つの多国間協力機構がある。

一つは南アジア地域協力連合(SAARC)、もう一つは東南アジア諸国連合(ASEAN)であり、前者にはインド、スリランカ、バングラデシュおよびモルディヴが、そして後者にはシンガポール、マレーシア、インドネシア、ミャンマーなどが関係する。しかし、いずれの機構も「経済協力」を謳うがその実行性は弱く、「内政不干渉」を看板にするため、各国ばらばらの対応であり「域圏外」からのインパクトに対して結束力は弱い。リード国であるインドは内政問題と北方対応に腐心している。また、1997年に創設された「本ガル湾多分野協力イニシアティブ(BIMSTEC)」は、旧来の二つの協力機構とは異なる斬新な構想を打ち上げている。その一つは、経済、エネルギー、気候変動、技術から文化、公衆衛生など14項目にわたる、アジアが直面している緊急かつ最重要な課題への取り組みを標榜している。もう一点は、組織名がバングラデシュ、インド、スリランカ、ネパール、ブータン、タイそしてのちに参加したミャンマー⁷か国の頭文字を冠しているように、ネパールとブータンをのぞけば、本ガル湾海域圏に属する利害共有国である。大和総研報告によれば、日系企業の将来参加も含めて、南アジア・東南アジア・日本との多元的な協力関係の可能性を示唆している⁷。しかし、現状における参加各国の内政と本ガル湾海域に向けている関心度から考えれば、ここ10～20年内の実現の可能性は必ずしも高いとは思えない。

もう一件、最近新たな構想が立ち上がっていることに注目したい。

2021年4月22日付「フィナンシャル・タイムズ」(電子版)は次のような内容を伝えている。

「一帶一路に対抗する広域経済圏として、インドとEUとの間にエネルギー、デジタル、運輸に関する連携パートナーシップを構想している」⁸。

この構想の実現性と持続性にはなお疑問符がつくが、「自由で開かれたインド太平洋」構想という軍事的プレゼンスによる連携とはまた違った、新たな経済的協

力や連携体制ができれば、ベンガル湾海域の自由航行・広域活動・相互パートナーシップに新たな展望が開けるだろう。

(2021年5月20日)

¹ ロミラ・ターパル著、辛島昇訳『インド史』1、みすず書房、1970年

² 同上

³ 重松伸司『マラッカ海峡物語—ペナン島に見る多民族共生の歴史—』集英社、2019年

⁴ ハンバントタにおける「債務の罠」問題については、新井悦代論文「99年間租借地となっても中国を頼るスリランカ」「IDE スクエア(電子版)」2018年10月に詳しい。

⁵ 八ツ井琢磨論文「中国『一帯一路』の南アジアでの展開—バングラデシュに見る中国の強みと課題—」、三井物産戦略研究所、2019年4月

⁶ LaFond, E. C. Oceanographic Studies in the Bay of Bengal., the Andhra University Memoirs in Oceanography. 1957.

⁷ 後藤圭祐論文「東南アジアと南アジアをつなぐ BIMSTEC」『大和総研、アジアインサイト』2015年2月26日

⁸ Financial Times 2021.4.22.

執筆者紹介 重松 伸司(しげまつ・しんじ)

京都大学文学研究科(東洋史学)博士課程中退、博士(文学)。インド・マドラス大学大学院、ハワイ州立大学大学院を経て、京都大学(助手)、名古屋大学(講師、助教授、教授)、三重県立看護大学、追手門学院大学で教鞭をとる。専門はインド移民およびベンガル湾海域圏に関する現地調査・分析。主な著書に『国際移民の歴史社会学—近代タミル移民研究—』(名古屋大学出版会、1999年)、『マラッカ海峡物語—ペナン島に見る多民族共生社会—』(集英社新書、2019年)、「ベンガル湾という世界—14~16世紀の地域交易圏—」『アジアから考える、2地域システム』(溝口雄三他編著、東京大学出版会、1993年)他。2019年度大同生命国際文化基金「地域研究賞」受賞。

